



加藤 元の



と暮らして
みませんか

45

日本語の「動物愛護」に当たる言葉は、不思議なことに英語にはありません。英語では「動物たち」に対しも、「ヒューマンであれ」という言葉が、「動物たちを虐待するなかれ」という言葉になります。

古くは、日本の「生類憐みの令」でよく分かるように、動物虐待は日常的で、また世界的にもありふれていました。ところが明治時代に入り、文明開化の一端として、当時の日本の上流階級の人々が、特に手本としていた英国やヨーロッパの貴族のように動物を愛し、守りましょう、と一般国民に呼びかけました。

本来の意味の、動物に対してもヒューマンであれ、また、動物を

「動物愛護」

「ヒューマン」最大公約数に

虐待されるなかれ、であれば、国民の誰でもがもつと納得のいく、最大公約数となり得たのです。その証拠に、欧米では家のない人にシエルターを造ると同時に、飼い主のいない捨て犬、捨て猫には「アニマルシエルター」を造り、ここで避妊・去勢手術を充実させてきました。

終戦後、連合軍の家族たちが、日本のために、犬や猫のシエルターと病院を合わせたものを東京・千駄ヶ谷に丸ごと寄付してくれました。日本の組織的なシエルターの始まりです。それが、「ヒューマンソサエティ」であり、日本語として「動物愛護協会」と訳され、一方、動物虐待防止協会は、動物福祉協会と訳されています。

今からでも遅くはありません。日本語の「動物愛護」は「私たちがのように動物を愛しなさい」ではなく、「動物たちに対してもヒューマンであれ、また動物たちを虐待することなかれ」という老若男女、誰でもがよく理解できる最大公約数から普及させることです。

そのためには、全国の行政による動物愛護センターをアニマルシエルターとして、愛護協会や福祉協会に運営を任ずことです。

(ダクタリ動物病院広尾病院院長、日本ヒューマン・アニマル・ボンド・ソサエティ会長)

《産経新聞2005年2月27日掲載》